

2008年3月3日

主催 (財) ミズノスポーツ振興会

(財) ミズノ国際スポーツ交流財団

## 「2007年度 ミズノ スポーツライター賞」受賞者決定

(財) ミズノスポーツ振興会及び (財) ミズノ国際スポーツ交流財団では、'90年度より「ミズノ スポーツライター賞」を制定し、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰しています。

3月3日、グランドプリンスホテル高輪で2007年度選考委員会を開き、受賞作品および受賞者を以下の通り決定いたしました。

### 【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】 (トロフィー、副賞100万円)

- ・「甲子園が割れた日ー松井秀喜5連続敬遠の真実」 中村 計 (新潮社)

### 【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】 (トロフィー、副賞各50万円)

- ・「勝つことのみが善であるー宿澤広朗全戦全勝の哲学」 永田 洋光 (ぴあ)
- ・「年間企画『アスリート争奪』」 毎日新聞社 運動部

詳細は別記の通りです。

(お問合せ先)

(財) ミズノスポーツ振興会 事務局	内橋	TEL: 03 (3233) 7009
ミズノ東京広報課	澤井・木水	TEL: 03 (3233) 7037
ミズノ大阪広報課	高橋・大澤	TEL: 06 (6614) 8373

## 記

名 称：2007年度 ミズノ スポーツライター賞

制 定 目 的：スポーツに関する優秀な作品とその著者（個人またはグループ）を顕彰し  
てスポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの若手  
スポーツライターの励みになる事を願い制定

選 考 対 象：主として新聞・雑誌・単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評論・  
ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの

選 考 委 員：委員長 岡崎 満義 氏（元㈱文藝春秋取締役、「Number」初代編集長）  
委 員 杉山 茂 氏（スポーツプロデューサー、

元NHKスポーツ報道センター長）

〃 村上 龍 氏（作家）

〃 ゼッターランド ヨーコ氏（スポーツキャスター）

〃 水野 正人 氏（(財)ミズノスポーツ振興会会長、ミズノ(株)会長）

※順不同

対 象 者：日本人および日本在住の外国人

受賞者及び選考理由：

● 「甲子園が割れた日－松井秀喜5連続敬遠の真実」

中村 計（新潮社）

（なかむら・けい）

1992年夏の甲子園で星陵高の松井秀喜が明德義塾に5打席連続で敬遠され、チームは敗れた。ファンもマスコミも明德を袋叩きにしたことが思い出されるが、なにせ15年も前のこと、風化しかかったこの「事件」を蒸し返したのは松井人気に乗ずるためか・・・と思って、読んで行くとこの「事件」が過去の出来事ではなく、著者が引き出した「真実」は今もなお真剣に議論すべきスポーツのテーマであることが分かる。本書は日本のスポーツ界、特に「観るスポーツ」のあり方、そしてスポーツ・ジャーナリズムに対する痛烈な批判になっていることが見て取れる。

「観るスポーツ」のファンたちは「らしさ」を求めている。甲子園での「らしさ」は「高校生らしさ」であるが、往々にしてメディアはファンの思いを代弁するかのごとき傲慢さで、スポーツシーンに脚色を加え、勝手な「らしさ」を押しつける。このケースの場合も、マスコミが勝手に思い描き、演出した「高校生らしい」感想は実は存在しなかった。球児たちはそれほどナイーブな高校生ではなく、与えられた環境をエンjoyしていたのだ。

高校野球のゲームの表層と、さらにその奥にある選手や監督のホンネに迫り、マスコミの権力性を撃った秀作である。

● 「勝つことのみが善である－宿澤広朗全戦全勝の哲学」

永田 洋光 (ぴあ)  
(ながた・ひろみつ)

2006年6月、55歳の若さで急逝した三井住友銀行専務執行役員、宿澤広朗の半生を綴ったノンフィクションである。著者の永田氏はフリーのスポーツライターで、高校時代に経験したラグビーの影響だろうか、過去の著作もみなラグビーがテーマである。中でも「日本ラグビー復興計画」(阪急コミュニケーションズ)は宿澤本人との共著であり、密な関係を築いていたことを窺わせる。本書に関しては宿澤が亡くなった1年後に出版されたものなので、この目的のための本人取材はない。過去の積み重ねや引用と、家族を含む関係者への取材で構成されている。

サラリーマンとして大会社の出世街道を突っ走った宿澤が常に注目を浴びてきたのはその切れの良い有言実行の生き様にある。それを実証するように数多くの名言が残されている。その言葉からうかがい知れる宿澤のパーソナリティは、妥協とは一切無縁の力強さに他ならない。このパーソナリティはラグビーの真髄あるいは美学に通じるのではないだろうか。だからこそ、著者自身をはじめとして多くの宿澤ファンが存在するのだと思う。本書で繰り返し紹介されるのは、そんな妥協を排除して前進する宿澤のダイナミズム。その先にあるものは「勝利」だ。本書はリズム感にあふれた文体で、宿澤の人生そのもののようなスピード感があり、読者を飽きさせない。

● 「年間企画『アスリート争奪』」

毎日新聞社 運動部

5月3日から12月6日まで連載され、年が明けても続いている。2007年掲載は「高校野球」「私は考える」「外国人留学生」「エリート養成」「特待生」「大学」の6部で計58回。5月3日から12月6日まで連載された。題名の通り、学校などによるアスリート学生・生徒の奪い合い構造に向き合った連載である。全体を通じて、少子化や子どものスポーツ離れが進行するなかで学校や各競技界が少数のパイを奪い合っている日本の若者スポーツの現状が浮かび上がる。そこにみえてくるのは、学校の名をあげることであり、入学志願者をふやすことであり、そのような学校経営と結託した学生スポーツ界の勝利至上主義の風潮であり、独自のエリート育成システムによって国際競争力をつけようとする競技団体の狙いである。争奪の対象となる子どもやティーンエイジャーはもはや商品化されている感すらある。第2部の「私は考える」で登場する各界の有識者たちの発言は、文武両道が本来の学生スポーツ、10代のスポーツのあり方だと説き、スポーツ馬鹿をつくらない政策、システムづくりが急務だと、勝利至上主義に警鐘を鳴らすものといえるだろう。

毎日新聞の企画はテーマ設定と論点が明快である。そのメッセージはアカデミックかつジャーナリスティックで、多方面の識者のコメントも含め、読者に考えることを促している。

以上